

フランスの学校衛生とコロニー・ド・ヴァカンス
— 19～20世紀転換期における教育と転地療養 —

河合 務

School Hygiene and Colonies de Vacances
Education and Translocation Care at the Turn of 20th Century France

KAWAI Tsutomu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第17巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.17 / No.2

令和2年 12月 25日発行 December 25, 2020

フランスの学校衛生とコロニー・ド・ヴァカンス

－ 19～20 世紀転換期における教育と転地療養 －

河合 務*

School Hygiene and Colonies de Vacances
Education and Translocation Care at the Turn of 20th Century France

KAWAI Tsutomu*

キーワード：コロニー・ド・ヴァカンス，学校衛生，転地療養，貧困家庭，過労

Key Words: colonies de vacances, school hygiene, translocation care, poor families, overwork

1. はじめに

本稿の目的は、フランスの学校衛生とコロニー・ド・ヴァカンスがいかなる関係にあるのかを問うことである。コロニー・ド・ヴァカンスとは「林間学校」と訳される¹こともあるように夏期を中心とした子どもの野外活動を指すが、19 世紀末から 20 世紀初頭の時期に学校衛生の一部としてコロニー・ド・ヴァカンスが組み込まれていく様相については、これまで本格的に検討されてきたわけではない²。日本における学校衛生の歴史を繙くならば、学校衛生の端緒を切り拓いた三島通良の『学校衛生学』（1893〔明治 26〕年）はその第 9 篇「體操及び遊戯」の中で「遠足、行軍、修学旅行等」を「極めて必要なり」としているが「林間学校」には注目していない³。ところが、1920（大正 9）年になると帝国議会で虚弱児童向けの林間学校奨励の建議が可決され、1918 年時点で全国に 777 カ所であった林間学校が 1921 年には 3240 カ所へと急増している⁴。なぜ「林間学校」はこのように興隆したのであろうか。また、なぜ「林間学校」は学校衛生の一部に組み込まれることになったのだろうか。

この点について本稿は 2017 年度～2020 年度科学研究費助成事業「フランス学校衛生論史研究」（基盤研究（C）、課題番号 17K04552、研究代表者：河合務）の研究成果の一部として検討するものである。この科研費研究の成果である拙稿「学校衛生論におけるリスク概念と教育」でも触れた点だが、1904 年にドイツ・ニュルンベルクで開催された第 1

回学校衛生国際会議、イギリス・ロンドンで開催された第 2 回学校衛生国際会議にも「校外生活における衛生」をテーマに掲げた分科会があり、学校衛生論のテーマ群は学校の建物・敷地の中だけに限定され完結したわけではない⁵。コロニー・ド・ヴァカンスもそうした校外生活における衛生のあり方と関係しているであろう。ただし、コロニー・ド・ヴァカンス事業を単純に「校外生活」という括りで把握するだけでは十分ではない。つまり、パリなどの都市部から山間部や臨海地域を含めた田舎（*campagne*）へ子どもを移動・滞在させる点や、「虚弱（*débile*）」な子どもを対象とする点などコロニー・ド・ヴァカンスの特徴について踏み込んで検討を行なうことは当時の学校衛生をめぐる国際的な動向の一端を明らかにするために是非とも必要な研究作業であり、同時にそれは「林間学校」の内実を解明するためのケース・スタディとしても位置づくと考えられる。そうした意味から本稿は 19～20 世紀転換期フランスの教育史上で展開されたコロニー・ド・ヴァカンス事業を取り上げ検討する。

章構成としては、まず 1880 年代のフランスでコロニー・ド・ヴァカンスが導入され普及していく経緯に触れ、この動向の中心にいたエドモン・コティネのコロニー・ド・ヴァカンス論を検討する（第 II 章）。続いて、19 世紀末の学校衛生著作におけるコロニー・ド・ヴァカンスの位置づけについて（1）疲労問題との関連、（2）貧困層の家庭環境との関連から検討する（第 III 章）。そして、20 世紀初頭の学校衛生著作におけるコロニー・ド・ヴァカンスにつ

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

いて第3回学校衛生国際会議に参加した医学博士 L. デュフェステルの著作『学校衛生』(1909年)の「学校的保護事業」というコロニー・ド・ヴァカンスの位置づけを中心に検討する(第IV章)。

II. コティネによるコロニー・ド・ヴァカンス事業の推進

コロニー・ド・ヴァカンスの黎明期は19世紀後半に遡る。スイスの牧師ピオンが1876年にチューリッヒの労働者家庭の虚弱な子ども68人を連れて丘陵地帯に行き夏休みを過ごしたFerien-Kolonie事業をモデルとした新しい余暇活動はドイツ、イタリア、フランス、スウェーデンなどヨーロッパ各国に広まった。ピオンが使い始めたドイツ語“Ferien-Kolonie”をフランス語に置き換えたのが“colonie de vacance”で、複数形で用いることが多いようである。1907年の第2回学校衛生国際会議の分科会名の英語、フランス語、ドイツ語での表記はそれぞれ“holiday camps”“colonies de vacances”“Ferienkolonien”となっている⁶。筆者は「林間学校」という訳語を否定するつもりはないが、敢えて直訳した場合の「休暇中の集落」という含意も捨てがたいと考えている⁷。また、英語の「ホリデー・キャンプ」には娯楽的要素の強い、いわゆる「レジャー」的なイメージがついて回る懸念がある。後述するようにコロニー・ド・ヴァカンスはキャンプ場での宿泊や活動が想定されていたわけではない。これらを考慮して本稿では「コロニー・ド・ヴァカンス」と表記しておくこととしたい。

フランスでは1881年に牧師テオドール・ロリオとその妻が行った3週間の田舎滞在の事業がコロニー・ド・ヴァカンスの嚆矢とされている⁸。そして、1880年代に学校基金(caisse des écoles)を活用しつつコロニー・ド・ヴァカンス事業を本格的に軌道に乗せたのがエドモン・コティネである。学校基金は国家・地方自治体からの補助金や個人からの寄付金を原資とするほか、衣服、書籍、食料品なども受け入れ、貧困家庭の子どもの就学を支援することを目的とする基金である⁹。コティネはパリ第9区の学校基金に勤務していた人物であり、コロニー・ド・ヴァカンス事業の推進にあたっては公教育省初等教育局長フェルディナン・ビュイッソンの理解・協力を得ていたとされている¹⁰。ビュイッソンの指示によってコロニー・ド・ヴァカンスの普及を目指す協会がパリに組織され、この協会の依頼を受けてコティネが執筆した論文が「コロニー・ド・ヴァカンスの形成と運営のための手引」である¹¹。以下、この論文からフランスのコロニー・ド・ヴァカンス事業の内容と方向性を探究していくこととしたい。

1. コロニー・ド・ヴァカンスの目的と対象

コロニー・ド・ヴァカンスの目的は以下のように規定されている。

「コロニー・ド・ヴァカンスは初等学校の、最も

虚弱である中でも最も貧しい者、最も貧しい中でも最も称賛に値する、虚弱児童(enfants débiles)のための予防衛生の制度である。」¹²

つまり、コロニー・ド・ヴァカンスは初等学校の児童の中でも「虚弱」で「貧しい」児童を対象とする予防衛生の制度という特徴がある。この衛生(hygiène)の制度という意味でコロニー・ド・ヴァカンスは事業開始の当初から学校衛生とも関連性を有していたと目されるが、コティネの同論文では学校衛生についての言及はない。これはコティネという人物が学校基金の運営に携わる行政実務家ではあっても、医学をベースとする衛生学者ではなかったという点に要因があると考えられる。

2. 「虚弱」概念

では、コロニー・ド・ヴァカンスの対象児童の条件となる「虚弱」と「貧しい」という語がもつ内容や程度とはどのようなものであろうか。

コティネは「虚弱(débile)」と「病気(malade)」を区別する。そして、コロニー・ド・ヴァカンスの対象児童から「病気の者」を除外したうえで、「虚弱」の具体例として次のようなものを挙挙している。つまり、弱さにより歩行が困難な者、心臓疾患が疑われる者、伝染病に罹りやすい者、(皮膚病の)白癬に罹患しかかっている者、器官の弱さをかかえている者などである¹³。

この当時の「虚弱」の概念に関しては『医科学百科事典』(1888年)の「虚弱(Débilité)」の項目を参照することができる。この言葉は「生命の活力があまりに弱い水準にあること」を意味するとされ、さらに「健康が依拠する器官の全体の状態が病気の原因への十分な抵抗力をもっていない時にも体質が虚弱だ」と説明されている¹⁴。

また、ディドロ/ダランベール監修の『百科全書』(1751年)にも「虚弱」の項目が設けられ哲学的・医学的な説明が加えられている¹⁵。このことから19世紀末に「虚弱」の概念が一举に成立したわけではないということが分かる。ただし、『百科全書』の「虚弱」項目も『医科学百科事典』の「虚弱」項目も、想定されている対象が成人なのか子どもなのかは明確ではなく、子どもの「虚弱」が焦点化されているわけではない。本稿が注目するのは19世紀末のフランスで「虚弱児童」の存在がコロニー・ド・ヴァカンス事業との関連において焦点化されたという点である。その際の「虚弱」概念は健康と「病気」の間に配置され、その両者を常に参照枠としつつ健

康面において何らかの欠損がある状態でありながら「病氣」以前（あるいは「病氣」未満）という相対的な概念として子どもを分類する機能を内包していた。

さらに留意しなければならないのは、この「虚弱」の基準は必ずしも明確に示されているわけではないという点である。上記のように「虚弱」の具体例は列挙されているが、どの例にも検査項目や測定値などの明確な基準が定められていたわけではない。そうした曖昧さの帰結としてコティネは、コロニー・ド・ヴァカンスへの参加が認められるかどうかは上記の具体例のそれぞれについて引率する教員や他の参加児童の負担にならないかどうかを考慮したうえで最終的には医者が判断するとしている¹⁶。また、同じ観点からベッドに寝ていることができない者も参加者の条件からは除外されている。

続いて「貧しい」の内容であるが、それは生活するうえで恒常的な不自由さを強いられる「赤貧（indigence）」に限定されるものではなく、私費でコロニー・ド・ヴァカンスに参加する金銭的余裕がない家庭の子どもが対象とされている¹⁷。貧困家庭の子どもを「虚弱」から救い出すことがコロニー・ド・ヴァカンスの機能として期待されており、これはコロニー・ド・ヴァカンスに資源を提供する学校基金の目的にもあてはまっている。

3. 「予防衛生」の方法

次に「予防衛生」の方法・手段についてであるが、コティネはコロニー・ド・ヴァカンスの目的と関わって次のように論じている。

「その目的は、豊かな田舎（campagne）での自然な訓練、清潔さ、よい食事、陽気さの助けを借りた大気療法（cure d'air）である。」¹⁸

このようにコロニー・ド・ヴァカンスは豊かな田舎への転地を基本とし、そこでの生活を通して子どもの健康増進を図る。田舎への移動は基本的に鉄道が想定され、客車の収容人数の関係から子ども9人と引率者の教員1人という構成がよいとされている¹⁹。

コティネは、スイスや北欧では農家に宿泊するコロニー・ド・ヴァカンスのタイプが多いことを紹介しつつも、清潔なベッドの確保や食事面などに衛生的な配慮を行き届かせる観点からフランスでは各地の師範学校に宿泊するタイプを推奨している²⁰。

コロニーでの生活の日課としては、早朝に起き、

ベッド周りの掃除や衣服の整頓をした後、浴室に入り石鹸と水で体を洗うことが推奨されている。この習慣が当時のフランス人にはまだあまり馴染みがないものだとコティネは指摘している²¹。

食生活の面では、教員が生徒と同じ料理を同じテーブルでとることとされ、事前に1週間あたりの肉、野菜、牛乳などの分量のおおよその量の計画を立てたうえでの食事をとることとされている²²。また、教員の目の届かない場所や時間に子どもが果実や牛乳をとることがないように注意するべきだとされている²³。

コロニー・ド・ヴァカンス事業で田舎に滞在する期間の長さは、諸外国で3週間かそれ以上となってきたことが言及され、食事の計画、保護者への手紙・報告が1週間毎とされていることからコティネは田舎への滞在期間を週単位で数週間と構想していたことも分かる²⁴。

晴れた日のアクティビティとしては、一種の訓練（entraînement）として散歩が推奨されるが、その時間や距離は教員の裁量とされ、子どもの状況を見ながら行われるとされている。散歩中の虫刺されや日射病への配慮も促されている²⁵。また、雨の日には室内で歌、ダンス、遊戯などを行い、男子には体操（ジムナスティック）、女子には裁縫なども推奨されている²⁶。コティネは「十分な大気（air）の中で生活するほど、より大きな利益を得る」²⁷と述べているが、この場合の「大気」には、都市の生活環境との対比の意味が込められていると考えられる。「大気」は都市では不十分であり、とりわけ貧困家庭の子どもはそれを享受するのが困難で田舎に転地する必要があるというのがコティネの趣旨だと考えられる。また、コティネの用いる「大気療法（cure d'air）」という用語の「療法（cure）」は、対象児童が「病氣」ではなく「虚弱」だと想定されていることに対応して医療的な「治療」のニュアンスは薄く、むしろ自然治癒力に力点を置いた「療養」ないし「健康回復」の意味が濃厚である。そしてコティネは出発時と帰還時に身長・体重・胸囲の測定を行なうこととしているが、学校医による検診等は求めていない²⁸。

コティネのコロニー・ド・ヴァカンス論は、このような「虚弱」の状態にある子どもを対象として転地療養という方法をフランスに普及させようとしたという点が浮かび上がってくる。しかし、コティネは学校衛生に関しては何ら言及しておらず、コロニー・ド・ヴァカンスと学校衛生の関係については彼の視界の外にあったと考えられる。そこで次章では学校衛生著作の中でコロニー・ド・ヴァカンスがど

のように言及されるのかを検討することとしたい。

Ⅲ. 子どもの疲労と貧困家庭の問題化

学校衛生関連著作におけるコロニー・ド・ヴァカンスに関する記述を検討すると、学齢期の子どもの疲労 (*fatigue* あるいは *surmenage*) 問題への対処と、夏期など学校の長期休みに子どもが過ごすことになる貧困家庭の問題への対処という主に二通りの期待が込められていたことが浮かび上がってくる。学校衛生で必須の留意事項とされてきた学校の「換気 (*ventilation*)」だけでは不十分である。ここでは前者の事例として A. コリノー『学校における衛生』(1889年)、後者の事例としてラビノポラン『学校衛生』(1896年)を参照する。

1. 過労問題とコロニー・ド・ヴァカンス

医学博士アルフレッド・コリノーの1889年の著作『学校における衛生』では脊柱側弯症や近視・乱視が取り上げられ²⁹、それとともに第5章全体を割いて「脳の過労 (*surmenage*)」が論じられている。「脳の過労」は一種の「病 (*mal*)」³⁰とされてはいる。ただ、医療的に確立された治療法は示されておらず、未だ模索の段階であったことが窺われる。そして、「身体訓練の欠如」を含めた、子どもの学校生活の全般的なあり方の問題性が指摘されている³¹。そして、同書第8章が「コロニー・ド・ヴァカンス」というタイトルで論じられ、この章の冒頭でコリノーはコロニー・ド・ヴァカンスが過労 (*surmenage*) 問題と関係していることに触れたうえで³²、次のように述べている。

「教育課程の簡素化;人びとはそれに関心がある。身体のを培うこと (*culture*);人びとは正當にもそれを義務として要求している。神経の緊張の緩和、精神の休息 (*repos*)、生活環境 (*climat*) の一時的な変化 (*changement temporaire*) だけが提供することができる生理的バランスの再構築;学校コロニーはそれを保証する。」³³

ここでの「学校コロニー」とはコリノーの論述の内容から判断してコロニー・ド・ヴァカンスと同義である。コロニー・ド・ヴァカンスに期待されているのは、神経の緊張の緩和、精神の休息、そして「生活環境の一時的な変化」がもたらす生理的バランスの回復である。これが教育課程の簡素化や身体教育(「身体のを培うこと」と並んで過労問題への対

応として必要だというのがコリノーの見解である。学校教育から生じる過労問題への対応として転地療養が注目されたのである。

また、コリノーは田舎の人々との交流についても効果が期待できるとしている。

「田舎の事物がある町ばかりでなく、田舎に住む人間と交流するようにさせる町に若い世代を置くことは計り知れない利点がある。田舎に住む者と都会に住む者とのこの共感的な関係は成果のないままではない。」³⁴

コリノーのコロニー・ド・ヴァカンス論は、コティネによるパリ第9区の実践を参照し³⁵、それを踏まえたうえで都会の子どもと田舎に住む人々との交流という要素への言及がある点で興味深い。

2. 貧困層の家庭環境とコロニー・ド・ヴァカンス

ラビノポラン『学校衛生』(1896年)は、貧困層の家庭環境の問題への対応としてコロニー・ド・ヴァカンスに期待し次のように述べている。

「学校の最大の恩恵は、窮屈で、混雑しており、暗く、風通しが悪く、そして悪臭を放つ環境にあたり、あるいは、細々と暮らしていたりする貧困層から、1日のあまりに短い間、彼らの子どもを抜き取ることである。そして、作業場に引き留められて両親が子どもの面倒をみることができないう間、危険をとまなう遭遇、不道德な手本、危険な交際による街路の有害な影響を子どもが受けないようにすることである。

コロニー・ド・ヴァカンスが考案されたのは、休暇の間にはいっそう増大するこの危険に備え、貧しくて生理的に欠乏する運命にある子どもに回復 (*reparateur*) の環境を与えるためである。」³⁶

このようにラビノポランは貧困家庭の惨状を訴え、その有害さから子どもを救出することを「学校の最大の恩恵」だと捉えている。そして、特に貧困家庭において学校の休暇期間に増大する「危険をとまなう遭遇、不道德な手本、危険な交際による街路の有害な影響」から子どもを救出するための手段としてコロニー・ド・ヴァカンスへの期待が表明されている。この場合、コロニー・ド・ヴァカンスは、子どもを救済する機能をもつ学校を休暇期間中に代替するものと位置づけられている。

以上のように、19世紀末の学校衛生著作においてコロニー・ド・ヴァカンスは①過労問題への対応策として、神経の緊張の緩和、精神の休息、そして「生活環境の一時的な変化」がもたらす生理的バランスの回復が期待されていた。この代表的論者はコリノーである。また、②貧困家庭において学校の休暇期間中に増大する危険性や悪影響から子どもを救済する機能が期待されていた。この代表的論者はラビ／ポランである。次章では20世紀初頭の学校衛生著作におけるコロニー・ド・ヴァカンスへの言及を検討していくこととしたい。

IV. 学校衛生の補完としての転地療養

デュフェステルの著作『学校衛生』(1909年)の第4部は「学校的保護事業 (les oeuvres de préservation scolaire)」と題され、この中の第5章が「学校コロニー」というタイトルでコロニー・ド・ヴァカンスが取り扱われている。ここで用いられる“préservation”とは子どもを危険から「守る」という「保護」の意味と子どもが「病気」に罹るのを「防ぐ」という「予防」の意味を同時にもっている。デュフェステルの「学校的保護事業」論で注目すべきなのは、学校基金を基盤として子どもに栄養バランスのよい食事を提供する学校食堂と並んで、同じく学校基金によって推進されるコロニー・ド・ヴァカンス事業が「子どもをよい衛生的条件の中に置き、身体の発達を促す」³⁷とされている点である。デュフェステルは次のように述べている。

「酷い災禍の中にある生徒を救うためには、治癒できる環境で生活させなければならない。大気 (au grand air)、田舎 (campagne) である。」³⁸

このようにデュフェステルは、田舎への転地療養を旨とするコロニー・ド・ヴァカンスを子どもの保護事業として位置づけている。この議論は前章で取り上げた19世紀末のコティネやラビ／ポランの延長上にある。ただし、デュフェステルの立場は疲労問題への対応としてコロニー・ド・ヴァカンスを論じるコリノーとは異なっている。デュフェステルは同書で疲労問題を知的な作業のあり方の改善としての「知的衛生 (hygiène intellectuelle)」の問題として論じており³⁹、コロニー・ド・ヴァカンスを疲労問題の解決策として期待していたようには思われない。デュフェステルは次のようにも述べている。

「コロニーは社会的保護事業 (oeuvre de préservation sociale) であり、サナトリウムではない。それゆえ、あらゆる病気 (malades) の者は拒絶しなければならない。」⁴⁰

こうしたデュフェステルの議論は、コロニー・ド・ヴァカンスの対象から「病気」の子どもを除外するコティネの立場を踏襲している。コロニー・ド・ヴァカンスはあくまで子どもが「病気」に罹るのを防ぐ「保護」＝「予防」としての役割が期待されているのである。

さて、先の引用箇所デュフェステルは、「コロニーは社会的保護事業であり、サナトリウムではない」と明確に区別している。「サナトリウム」とは一般的には「療養所」を指し、中でも「結核療養所」が典型であるが、それは「林間学校」のように期間限定ではなく常設の専門施設である。そして、デュフェステルは著書『学校衛生』の中で結核の治療について第6章「野外学校 (les écoles de plein air)」において次のように述べている。

「進行した時期にはほとんど治療できない結核は、適切な時期に介入すれば常に治療可能だという原則がある。」⁴¹

デュフェステルは1904年にドイツ・ベルリン校外のシャルロテンブルグの森に設置された「野外学校」をモデルとしてヨーロッパ各地に広がりつつあった「野外学校」を「サナトリウム」的な要素の強い学校として捉えていた。

この「野外学校」は20世紀初頭の時期、英語圏の学校衛生著作の一章を占めるに至っている。たとえばジェームス・カー『ニューズホームの学校衛生：学校生活に関わる健康の法則』(1916年)は、1887年にイギリスで初版が刊行され1907年までに12版を数えたアーサー・ニューズホームの『学校衛生：学校生活に関わる健康の法則』をリライトした学校衛生著作であるが⁴²、同書の第4章では「野外 (The open air)」と題され「野外学校」の広がり論じられている。同書では「野外学校」が次のように類別され解説されている。

- A. 野外学校
 - i. 野外学校、あるいは森の学校 (シャルロテンブルグのそれのような)、そこに子どもは毎日通い、夜は帰宅する。
 - ii. 都市部の野外学校、そこでは子どもは夜も

- 寝泊まりする(デットフォードのそれのような)
- iii. 田舎あるいは臨海の居住施設型の学校、回復期(recovery)の学校、そこでは子どもは何か月もの間、新鮮な環境に置かれることが可能である。
 - iv. 浮かぶ船の学校(ニューヨークにあるような)
- B. 普通昼間学校の施設の改造型
- i. ベランダ、野外の教室、屋根のある教室
 - ii. 遊び場教室、公園や野外空間にある教室
- C. 学校施設におけるレクリエーションの変種の短期型
- i. 日帰り、数日、数週間の学校漂泊(School wanderings)あるいは学校遠足
 - ii. 野外での休暇学校
 - iii. 1週間あるいは数週間の田舎の休暇計画⁴³

以上のような3つの大分類、9つの小分類である。フランスのコロニー・ド・ヴァカンスをあえてこの分類法にあてはめて考えるとすれば比較的 A-iiiに近いように思われる。ただし、コロニー・ド・ヴァカンスの滞在期間は「数カ月」より短い「数週間」が想定されていた。そして、明治期に三島通良が『学校衛生学』において「体操及び遊戯」として必要性を論じた「遠足、行軍、修学旅行等」はC-iに近いということになるだろうか。ともあれ、ジェームス・カーは次のように述べて教育における「野外」と「自然」の意義を強調している。

「自然への回帰——『シンプル・ライフ(simple life)』——は多くの哲学者や教育家の数年にわたる叫びであり、故なきことではない。というも大都市では、私たちの社会システムは少数の者が土地をもつことを可能にし、他者の稼ぎの大部分を地代としてとることを認め、これによって特に貧民の子どもはとてども広範囲にわたって身体的に苦しんでいる。」⁴⁴

つまり、大都市の生活環境で身体的に苦しんでいる都市部の貧困層の子どもが「自然への回帰」と「シンプル・ライフ」を享受することを可能にする事業としてカーは「野外学校」を肯定的に紹介し、学校衛生著作の一角に位置づけたのである。

さて、1907年にロンドンで開催された第2回学校衛生国際会議の第6分科会は「校外生活の衛生、ホリデー・キャンプと学校、家庭と学校の関係」がテーマとされていたが、この分科会の中でフランスの

コロニー・ド・ヴァカンスが紹介されるとともにヨーロッパ各国の「野外学校(open air schools)」の動向が紹介されている⁴⁵。学校衛生国際会議の場でもコロニー・ド・ヴァカンスと「野外学校」は類似するものと捉えられる傾向にあったわけだが、デュフェステルは、結核を含めた「病気」から子どもを「保護」し「予防」することに力点を置き、「虚弱児童」を対象とするコロニー・ド・ヴァカンス事業を「サナトリウム」とは異なる特徴をもつものとして強調していたのである。ただ、結核の治療との関係で言えば⁴⁶、コロニー・ド・ヴァカンス、「野外学校」、サナトリウムなどは薬品や抗生物質を用いた化学療法が確立される20世紀中葉以前の予防法・治療法を採用しており、自然治癒力に大きく期待している点では共通している。転地療養という特徴をもつコロニー・ド・ヴァカンスが興隆した背景にも、化学療法が確立される以前の時代状況において「自然」に対する注目が強まったことと大いに関係していたと考えられる。

IV. 結語

このようにコロニー・ド・ヴァカンスは19世紀末から20世紀初頭のフランスで学校衛生の一部に組み込まれることとなった。本稿の考察から明らかになった点は主に以下の4つに整理することができる。

第一に、フランスのコロニー・ド・ヴァカンス事業はスイスのピオン牧師が開始したFerien-Kolonie事業をモデルとし、公教育省初等教育局長フェルディナン・ビュイソンの協力を受けながら1880年代に本格的に推進された。この動向の中心にいたのはパリ第9区の学校基金の行政実務者エドモン・コティネであり、彼の論文「コロニー・ド・ヴァカンスの形成と運営のための手引」によると、コロニー・ド・ヴァカンスは「虚弱」で「貧しい」初等学校の児童を対象とする予防衛生の制度であり、「病気」の子どもは対象から除外されている。

第二に、コティネが勤務した学校基金は国家や地方自治体からの補助金、個人からの寄付金、衣服、書籍、食料品などの現物の寄贈を原資として貧困家庭の子どもへの就学支援を業務としたが、コロニー・ド・ヴァカンスもこの学校基金によって運営され、田舎での転地療養によって「虚弱」で「貧しい」子どもの健康回復が目指された。そして、「虚弱」な子どもは「病気」ではないものの、弱さにより歩行が困難な者、心臓疾患が疑われる者、伝染病に罹りやすい者、(皮膚病の)白癬に罹患しかかっている者、

器官が弱いなどの具体例があげられたが、「虚弱」の基準は明確ではなかった。

第三に、学校衛生関連著作においてコロニー・ド・ヴァカンスに期待されたのは主に①疲労問題への対応、②貧困家庭の有害な環境への対応である。19世紀末の時点で①の視点を強調していたのはコリノー『学校における衛生』であり、②の視点を打ち出していたのはラビノラン『学校衛生』であった。コリノーは、学校教育から生じる過労問題への対応としてコロニー・ド・ヴァカンスの転地療養という性質に注目し、教育課程の簡素化と身体教育とともにコロニー・ド・ヴァカンス事業の必要性を主張した。ラビノランは貧困家庭の有害な環境から子どもを救い出すことを「学校の最大の恩恵」とし、学校の長期休暇の期間における貧困家庭の有害な影響から子どもを救い出す手段としてコロニー・ド・ヴァカンスに注目した。

第四に、20世紀初頭においてコロニー・ド・ヴァカンスを「学校的保護事業」として注目したのがデュフェステルの『学校衛生』である。デュフェステルは、学校基金によって推進されるコロニー・ド・ヴァカンス事業が学校食堂とともに「子どもをよい衛生的条件の中に置き、身体の発達を促す」と論じていた。

注

¹ 犬飼崇人「フランス第三共和政初期における林間学校—衛生と健康の教育をめぐる—」『学習院史学』第45号、2007年76-93頁

² フランスのコロニー・ド・ヴァカンスに関する主な先行研究としては、Rey-Herme, P. A., *La colonie de vacances, hier et aujourd'hui*, Vitte, 1954, Downs, L. L., *Childhood in the promised land*, Duke university press, 2002, Downs, L. L., *Histoire des colonies de vacances*, Perrin, 2009, 犬飼、同上論文のほか、上垣豊『規律と教養のフランス近代—教育史から読み直す—』ミネルヴァ書房、2016年の補章「スカウト運動とコロニー・ド・ヴァカンス」336-358頁があるが、いずれもコロニー・ド・ヴァカンスと学校衛生との関連性を検討したものではない。

³ 三島通良『学校衛生学』博文館、1893（明治26）年262頁

⁴ 平沢信康「大正後期の群馬県における林間学校の誕生」『上武大学ビジネス情報学部紀要』第16巻、2017年6頁

⁵ 拙稿「学校衛生論におけるリスク概念と教育—シャルル・シャボの学習（travail）論の検討—」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第16巻第2号、2020年41-42頁。

⁶ *Second international congress on school hygiene, transactions*, 1907, p. 940

⁷ 明治末期にドイツのフェリエンコロニー（Ferienkolonie）が日本に紹介された当時は直訳に近いかたちで

このような経緯を経て19～20世紀転換期フランスのコロニー・ド・ヴァカンスは学校衛生を補完するものとして注目され、学校衛生の一部に組み込まれることとなった。1902年にフランス政府が設置した「人口減退に関する委員会」の下部委員会「死亡率に関する小委員会」が1911年にまとめた『死亡率の原因に関する総合的報告』においてもコロニー・ド・ヴァカンス事業は学校衛生とともに取り上げられ、子どもの死亡抑制と健康回復に寄与する事業として注目されている⁴⁷。この報告書の背景には上記のようなコロニー・ド・ヴァカンス事業と学校衛生を連動させようとする動向が存在していたのである⁴⁸。

「休暇聚落」「休暇移住」「休暇転地」等と邦訳されていた。平沢、前掲論文5頁

⁸ 犬飼、前掲論文82-83頁、上垣、前掲書340頁。

⁹ 学校基金の制度は「熱心な生徒への褒賞と困窮している生徒への救済によって学校に通うことを支援する」ことを目的とし、一部地域では19世紀半ばから導入され始め、1882年にはすべての地方自治体の義務として制度化された。*Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire* (dir. Buisson, F.), Hachette, 1911, pp.202-204

¹⁰ *La revue pédagogique*, tome 11, Juillet-Décembre 1887, p. 44

¹¹ Cottinet, E., “Instruction pour la formation et le fonctionnement des colonies de vacances”, *La revue pédagogique*, tome. 11 Juillet-Décembre, 1887, pp. 44-59

¹² *Ibid.*, p. 44

¹³ *Ibid.*, p. 54

¹⁴ *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*. Première série, Tome vingt-sixième, (dir. de Raige-Delorme et A. Dechambre) G. Masson, 1888, p. 75

¹⁵ *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, 1751, Tome 4, pp. 649-651

¹⁶ Cottinet, E., “Instruction pour la formation et le fonctionnement des colonies de vacances”, *La revue pédagogique*, tome. 11 Juillet-Décembre, 1887, p. 54

¹⁷ *Ibid.*

¹⁸ *Ibid.*, p. 42

¹⁹ *Ibid.*, p. 53

- ²⁰ *Ibid.*, pp. 49-51
- ²¹ *Ibid.*, p. 57
- ²² *Ibid.*, p. 52
- ²³ *Ibid.*, p. 58
- ²⁴ *Ibid.*, p. 45, pp. 48-49, p. 52, p. 58
- ²⁵ *Ibid.*, p. 58
- ²⁶ *Ibid.*, p. 58
- ²⁷ *Ibid.*, p. 58
- ²⁸ *Ibid.*, pp. 55-56
- ²⁹ Collineau, A., *L'hygiène à l'école*, J. B. Baillièrre et fils, 1889, pp. 32-33, p. 90, pp. 99-133
- ³⁰ *Ibid.*, p. 137
- ³¹ *Ibid.*, p. 137
- ³² *Ibid.*, p. 206
- ³³ *Ibid.*, pp. 226-227
- ³⁴ *Ibid.*, p. 227
- ³⁵ *Ibid.*, p. 213
- ³⁶ Labit, et H. Polin, *Hygiène scolaire*, G. Carré, 1896, p. 258
- ³⁷ Dufestel, L., *Hygiène scolaire*, Octave doin et fils, 1909, p. 302
- ³⁸ *Ibid.*, p. 329
- ³⁹ 拙稿「学校衛生と子ども観——20世紀初頭フランスにおける子どもの疲労問題と『知的衛生』——」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』第14巻第2号、2018年173-175頁、参照
- ⁴⁰ Dufestel, L., *Hygiène scolaire*, p. 322
- ⁴¹ *Ibid.*, p. 328
- ⁴² Kerr, J., *Newsholme's school hygiene*, The Macmillan company, 1916, p. 5. なお、アーサー・ニューズホームの『学校衛生』について分析した研究として拙稿「A. ニューズホームの学校衛生論——学校の衛生化と管理・道徳」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』第12巻第2号、2015年61-74頁、参照。
- ⁴³ Kerr, *Newsholme's school hygiene*, pp. 61-62
- ⁴⁴ Kerr, *Newsholme's school hygiene*, pp. 56-57
- ⁴⁵ *Second international congress on school hygiene, transactions*, 1907, pp. 940-984
- ⁴⁶ 産業化にともなって19世紀に欧米で広がりを見せた結核の死亡率を低下させる決め手としての化学療法について立川昭二『病気の社会史』岩波現代文庫、岩波書店、2007年125-158頁、参照。
- ⁴⁷ *Sous-commission de la mortalité, Rapport general sur les causes de la mortalité*, Melun, 1911, p. 33, p. 60, p. 69. 同報告書と学校衛生との関連性について拙稿「学校衛生と産育——乳幼児死亡の回避可能性をめぐる20世紀初頭フランスの動向——」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』第15巻第1号、2018年93-99頁、参照。
- ⁴⁸ こうしたコロニー・ド・ヴァカンス事業と学校衛生の連動の動向は、1880年代の北アメリカに起源をもつ「サマー・キャンプ」や1908年にボーア戦争の英雄ロバート・ベイデン＝パウエルによってイギリスで始められたボーイスカウト運動とは源流を異にしていた。その後の展開において、これらが相互に重なり合うようになっていく可能性があるが詳細は今後の課題としたい。

謝辞：本稿は2017年度～2020年度科学研究費助成事業「フランス学校衛生論史研究」(基盤研究(C)、課題番号17K04552、研究代表者：河合務)の研究成果の一部である。